

平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査 帯広市の結果について

I 調査の概要

1 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査の対象

- 市内小学校の第6学年の児童
- 市内中学校の第3学年の生徒

3 調査の内容

(1) 児童生徒に対する調査

① 教科に関する調査(国語、算数・数学、英語)

- ・身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

※上記を一体的に問う。

② 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査を実施

(2) 学校に対する質問紙調査

指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査を実施

4 調査の方式

悉皆調査(対象の全児童生徒が参加)

5 調査の実施日

平成31年4月18日(木)

6 調査を実施した学校数・児童生徒数

| | 小学校数（校） | 児童数（人） | 中学校数（校） | 生徒数（人） |
|---------|---------|-----------|---------|---------|
| 全国（公立） | 19,263 | 1,028,203 | 9,513 | 938,888 |
| 北海道（公立） | 997 | 38,837 | 584 | 37,859 |
| 帯広市 | 26 | 1,262 | 14 | 1,244 |

※表中の全国及び北海道（公立）の数値は、「平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査 調査結果のポイントについて～北海道（公立）における調査結果～」より抜粋

※表中の帯広市の児童生徒数は、回収した解答用紙が最も多かった教科の解答用紙の枚数で算出

7 調査結果の解釈等に関する留意事項

- 本調査の結果については、児童生徒が身に付けるべき学力の特定の一部であることや、学校における教育活動の一側面に過ぎないことに留意する必要がある。
- 本調査の結果においては、平均正答率等の数値を示しているが、これらの数値のみで必ずしも調査結果のすべてを表すものではなく、中央値、標準偏差等の数値や分布の状況を表すグラフの形状など他の情報と合わせて総合的に結果を分析・評価する必要がある。また、個々の設問や領域等に着目して学習指導上の課題を把握・分析し、児童生徒一人一人の学習改善や学習意欲の向上につなげることも重要である。
- 本市の各教科の平均正答率については、国が公表した整数値と、国から提供されたデータをもとに市教委が独自に算出した小数値で示している。
- 今年度から実施した中学校英語の結果は、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」について示している。「話すこと」については実施生徒数が異なるため、参考値として国と本市の結果を示している。

Ⅱ 結果の概要

1 本市の児童生徒の学力の状況の概観

【各教科の平均正答率】

| | 小学校 | | 中学校 | | | |
|------------|-------------|-------------|-------------|-------------|----------------|-------------|
| | 国語 | 算数 | 国語 | 数学 | 英語 | |
| | | | | | 聞くこと・読むこと・書くこと | 話すこと(参考値) |
| 全国(公立) | 63.8 | 66.6 | 72.8 | 59.8 | 56.0 | 30.8 |
| 北海道(公立) | 62.8 | 64.5 | 72.1 | 58.1 | 54.2 | — |
| 帯広市 | 63.7 | 64.4 | 73.7 | 59.7 | 53.3 | 32.7 |
| 全国差 | -0.1 | -2.2 | +0.9 | -0.1 | -2.7 | +1.9 |
| 全道差 | +0.9 | -0.1 | +1.6 | +1.6 | -0.9 | — |

※全国(公立)：国が公表した小数値

※全道(公立)：道教委が独自に算出し、公表した小数値

※帯広市：国から提供されたデータをもとに市教委が独自に算出した小数値

※英語「話すこと」については参考値(国が公表した小数値については国公私立の合計の値)

○ 小学校

- ・全国と比較すると、国語、算数ともに全国の平均正答率を下回った。
- ・全国の平均正答率との差を比較すると、最大で-2.2ポイントであった(平成30年度-2.5ポイント)。
- ・全道と比較すると、国語で全道の平均正答率を上回ったが、算数で全道の平均正答率を下回った。

○ 中学校

- ・全国と比較すると、国語で全国の平均正答率を上回ったが、数学と英語「聞くこと、読むこと、書くこと」で全国の平均正答率を下回った。
- ・全国の平均正答率を下回った教科では、全国との差が最大で-2.7ポイントであった(平成30年度-0.4ポイント以内)。
- ・全道と比較すると、国語、数学で全道の平均正答率を上回ったが、英語「聞くこと、読むこと、書くこと」で全道の平均正答率を下回った。
- ・英語「話すこと」については、参考値ではあるが、全国(国公私立)の平均正答率を上回った。

【全国の平均正答率を上回った（同等の）学校数】

○ 小学校

- ・国語で14校（平成30年度は国語Aで14校、国語Bで13校）
- ・算数で10校（平成30年度は算数Aで13校、算数Bで11校）

○ 中学校

- ・国語で8校（平成30年度は国語Aで8校、国語Bで8校）
- ・数学で6校（平成30年度は数学Aで10校、数学Bで10校）
- ・英語「聞くこと、読むこと、書くこと」で3校、英語「話すこと」で7校

【帯広市における平均正答率の最も高かった学校と最も低かった学校との差】

○ 小学校

- ・国語で27.6ポイント
（平成30年度は国語Aで25.8ポイント、国語Bで26.5ポイント）
- ・算数で20.5ポイント
（平成30年度は算数Aで25.5ポイント、算数Bで35.0ポイント）

○ 中学校

- ・国語で22.5ポイント
（平成30年度は国語Aで8.8ポイント、国語Bで10.9ポイント）
- ・数学で17.4ポイント
（平成30年度は数学Aで11.5ポイント、数学Bで14.6ポイント）
- ・英語「聞くこと、読むこと、書くこと」で12.1ポイント、英語「話すこと」で37.0ポイント

【北海道の平均正答率を5ポイント以上、下回った学校数】

○ 小学校

- ・国語で2校（平成30年度は国語Aで7校、国語Bで6校）
- ・算数で2校（平成30年度は算数Aで7校、算数Bで6校）

○ 中学校

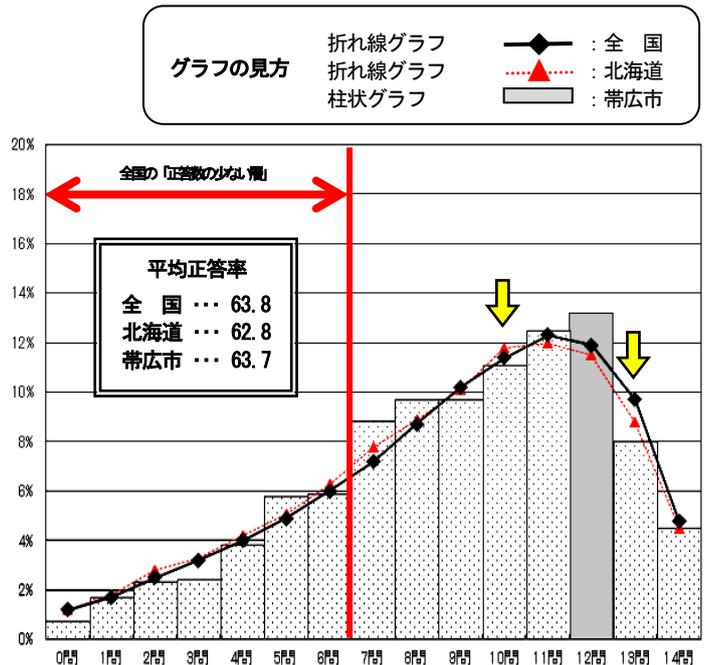
- ・国語で2校（平成30年度は国語Aで0校、国語Bで1校）
- ・数学で1校（平成30年度は数学Aで1校、数学Bで0校）
- ・英語「聞くこと、読むこと、書くこと」で2校、英語「話すこと」で5校

※英語「話すこと」については全国の平均正答率を5ポイント以上、下回った学校数

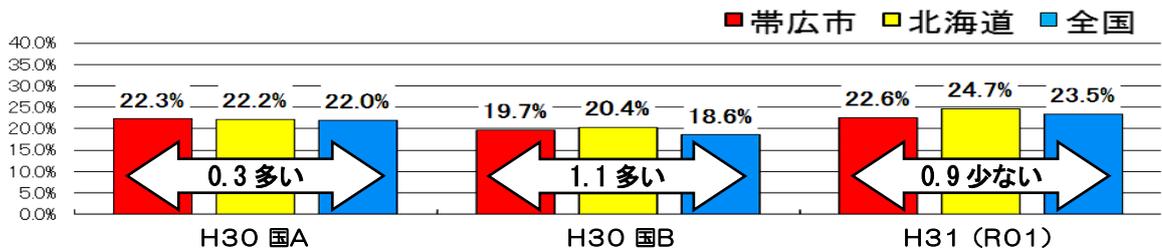
2 各教科の正答数の分布

【小学校 国語】

- ・ 14問中、正解した児童数が最も多かったのは、全国、北海道が11問、本市が12問だった。
- ・ 全国と比較して、14問中10問及び13問正解した児童数の割合が低かった。

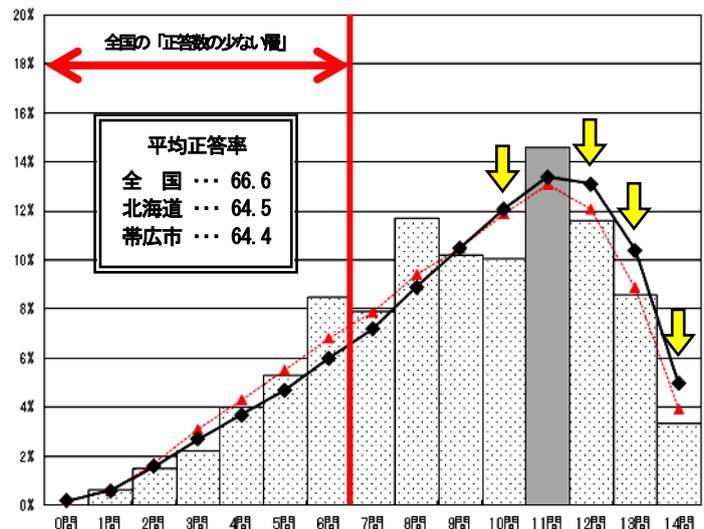


全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合

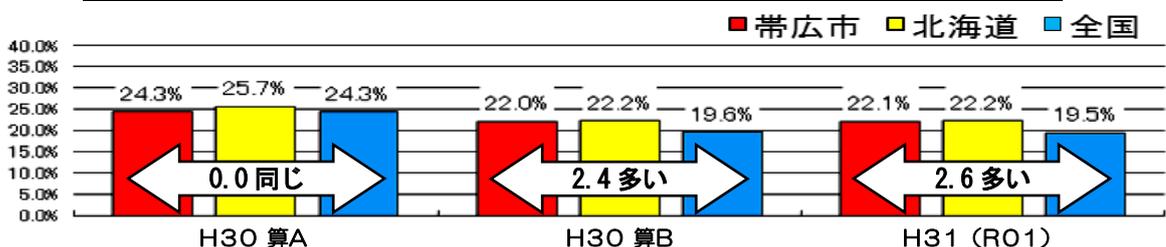


【小学校 算数】

- ・ 14問中、正解した児童数が最も多かったのは、全国、北海道、本市ともに11問だった。
- ・ 全国と比較して、14問中10問及び12問以上正解した児童数の割合が低かった。

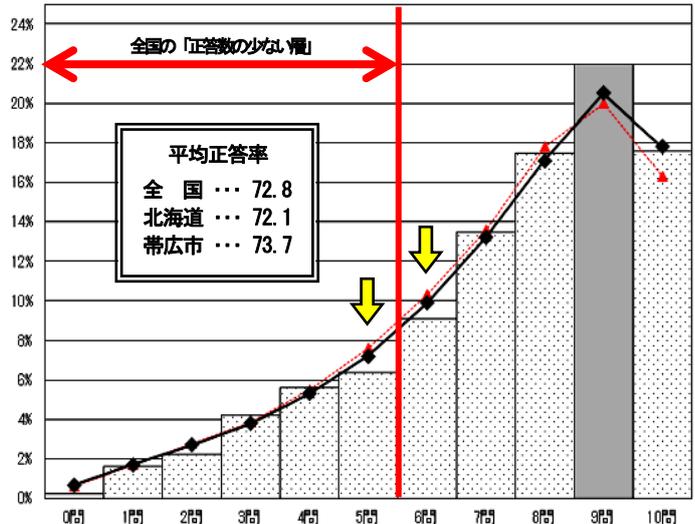


全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合

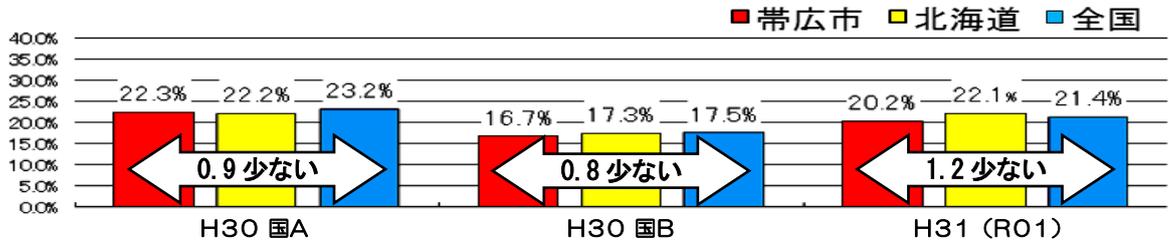


【中学校 国語】

- ・ 10問中、正解した生徒数が最も多かったのは、全国、北海道、本市ともに9問だった。
- ・ 全国と比較して、10問中5問及び6問正解した生徒数の割合が低かった。

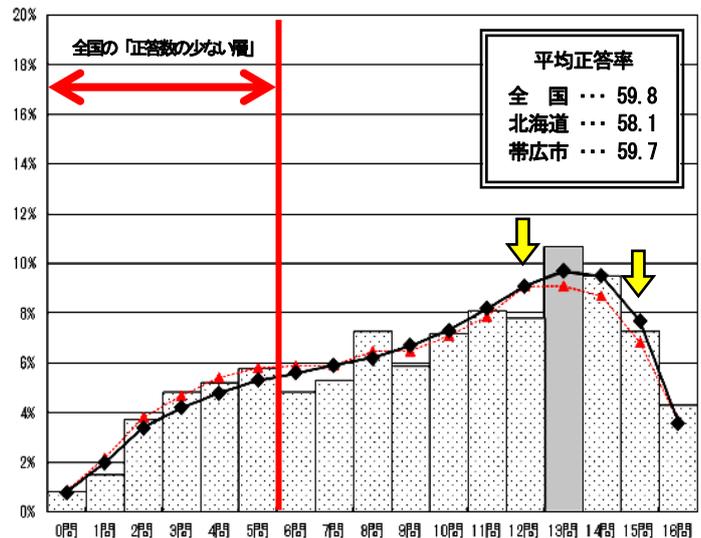


全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合

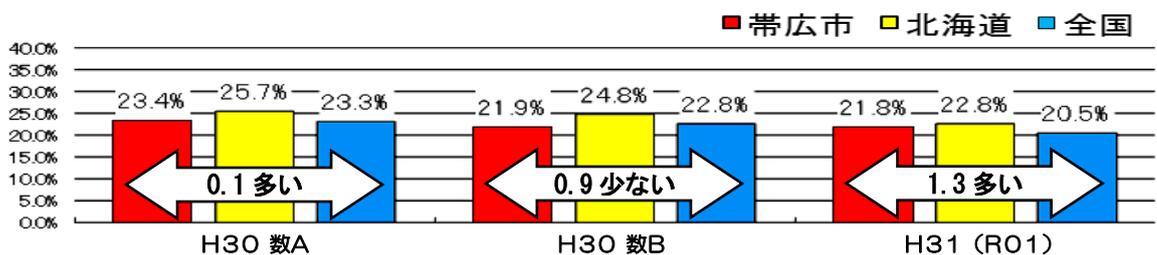


【中学校 数学】

- ・ 16問中、正解した生徒数が最も多かったのは、全国と本市が13問、北海道が12問と13問だった。
- ・ 全国と比較して、16問中12問及び15問正解した生徒数の割合が低かった。

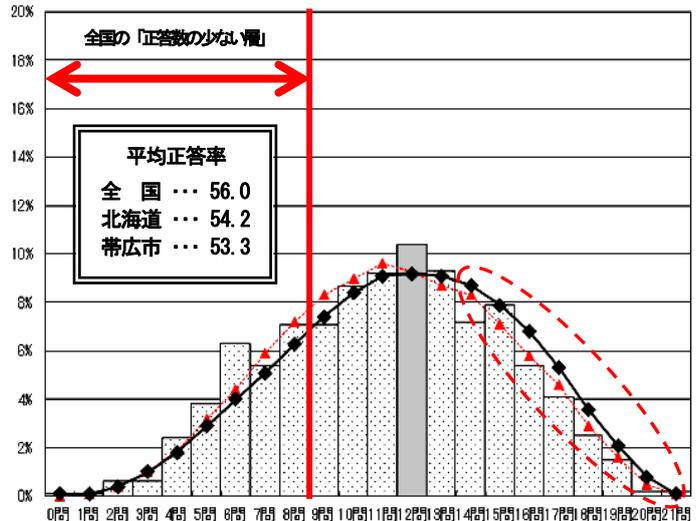


全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合

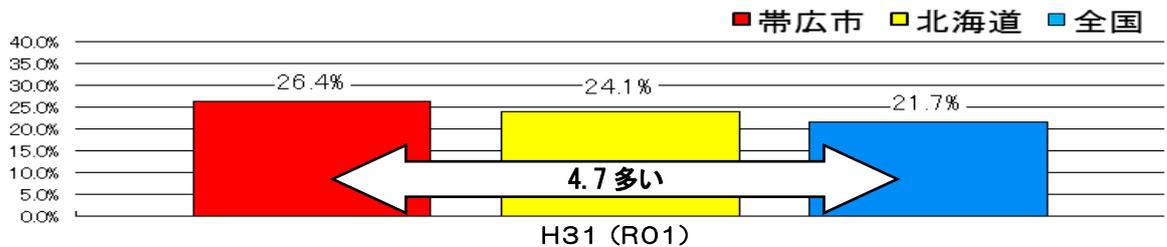


【中学校 英語「聞くこと、読むこと、書くこと」】

- ・ 21問中、正解した生徒数が最も多かったのは、全国と本市が12問、全道が11問だった。
- ・ 全国と比較して、21問中14問以上正解した上位層の生徒数の割合が低かった。

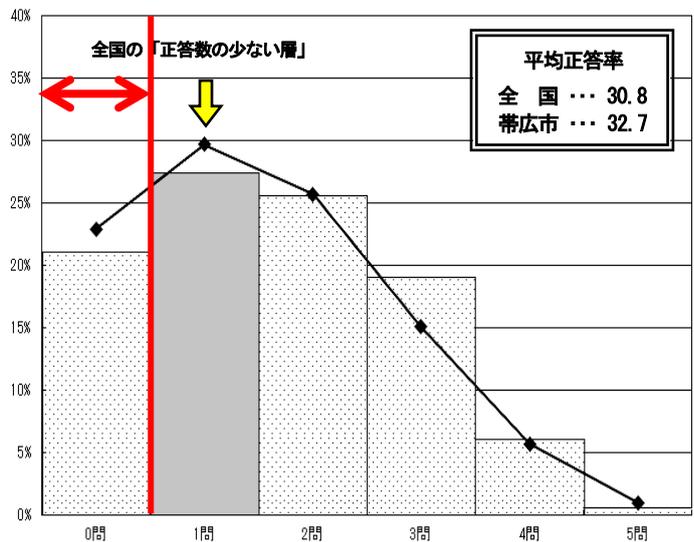


全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合



【中学校 英語「話すこと」※参考値】

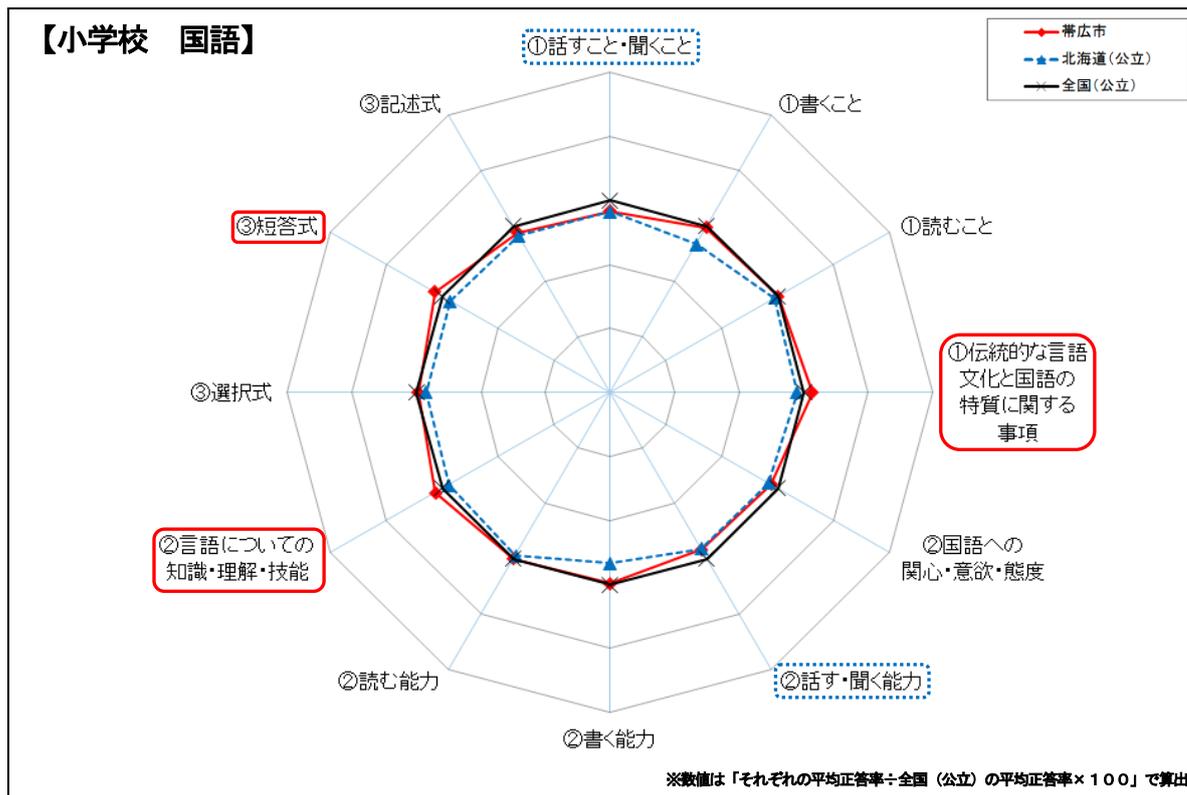
- ・ 5問中、正解した生徒数が最も多かったのは、全国、本市ともに1問だった。
- ・ 全国と比較して、5問中1問正解した生徒数の割合が低かった。



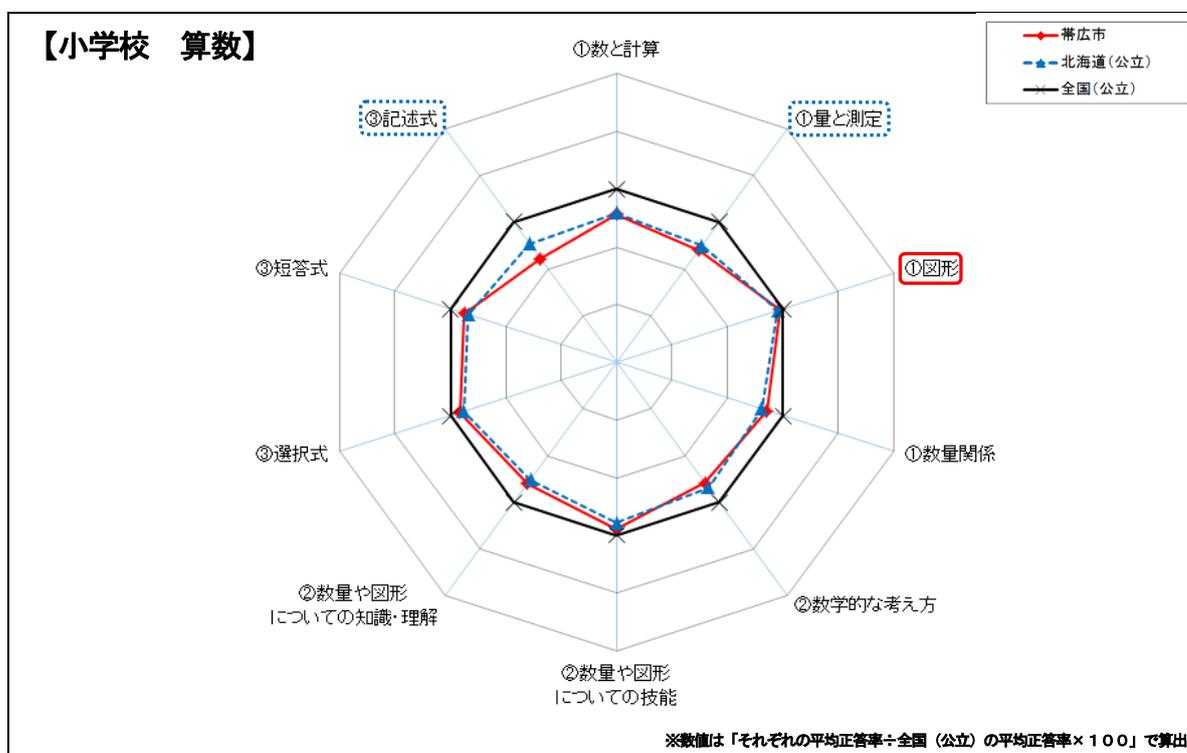
全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合



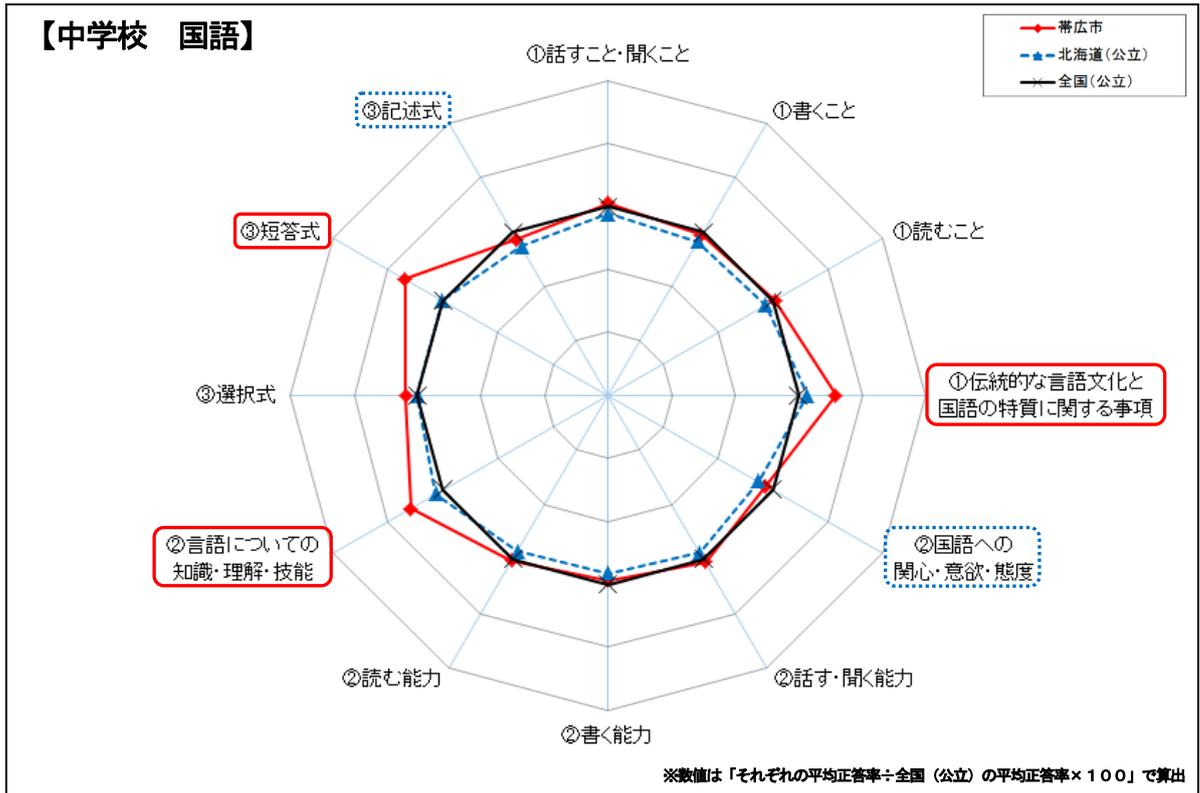
3 各教科の平均正答率（レーダーチャート図）



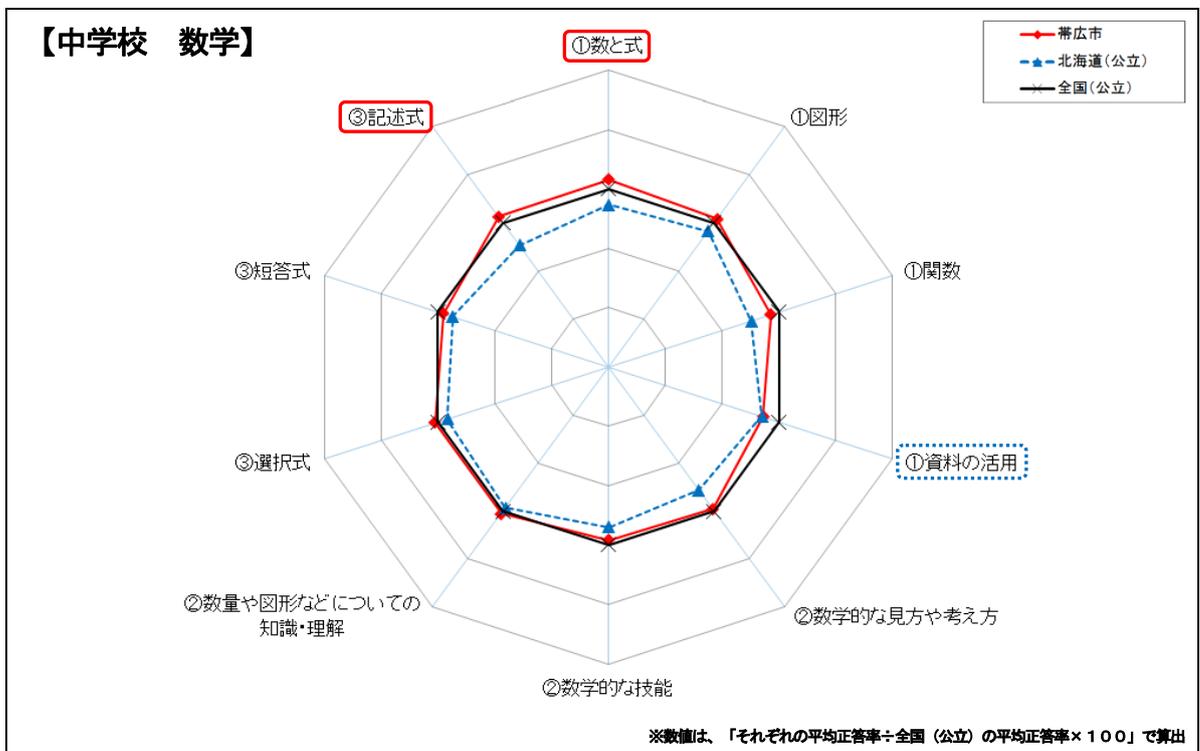
学習指導要領の領域等「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」、評価の観点「言語についての知識・理解・技能」、問題形式「短答式」で全国の平均正答率を上回った。しかし、学習指導要領の領域等「話すこと・聞くこと」、評価の観点「話す・聞く能力」で全国の平均正答率を下回った。



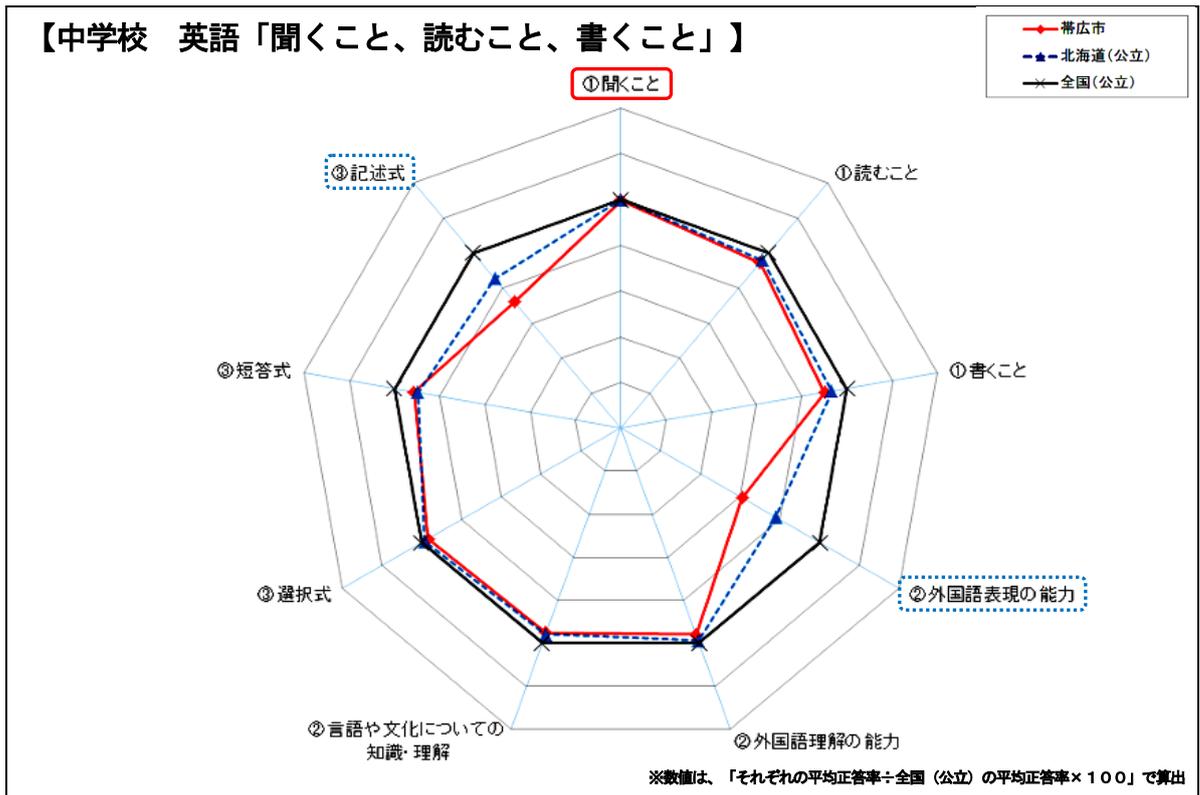
学習指導要領の領域等「量と測定」、問題形式「記述式」をはじめ全ての区分で全国の平均正答率を下回ったものの、学習指導要領の領域等「図形」では全国の平均正答率とほぼ同等の結果だった。



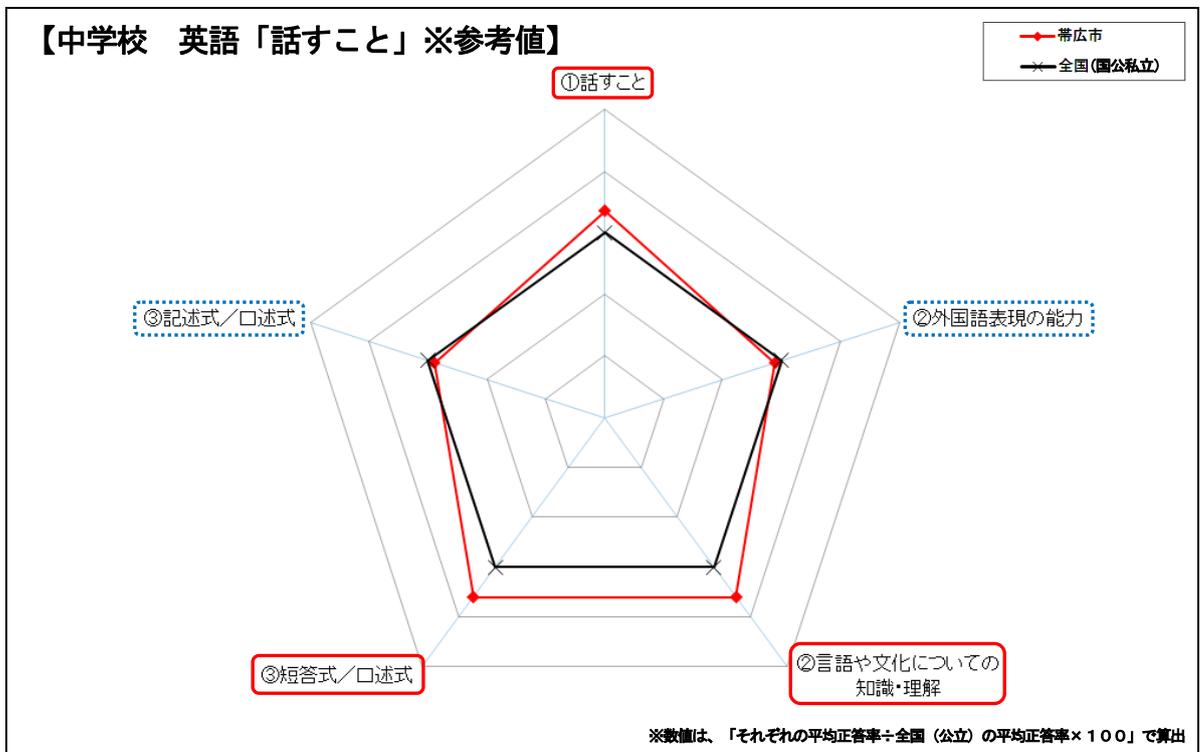
学習指導要領の領域等「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」、評価の観点「言語についての知識・理解・技能」、問題形式「短答式」で全国の平均正答率を上回った。また、評価の観点「国語への関心・意欲・態度」、問題形式「記述式」で全国の平均正答率とほぼ同等の結果だった。



学習指導要領の領域「数と式」、問題形式「記述式」で全国の平均正答率を上回ったものの、学習指導要領の領域「資料の活用」で全国の平均正答率を下回った。



評価の観点「外国語表現の能力」、問題形式「記述式」をはじめ全ての区分で全国の平均正答率を下回ったものの、学習指導要領の領域等「聞くこと」では全国の平均正答率とほぼ同等の結果だった。

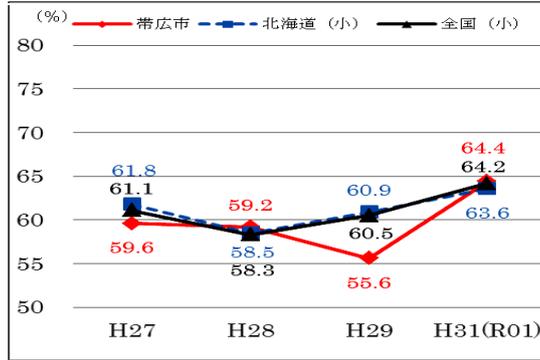


学習指導要領の領域「話すこと」、評価の観点「言語や文化についての知識・理解」、問題形式「短答式/口述式」で全国の平均正答率を上回った。また、評価の観点「外国語表現の能力」、問題形式「記述式/口述式」で全国の平均正答率とほぼ同等の結果だった。

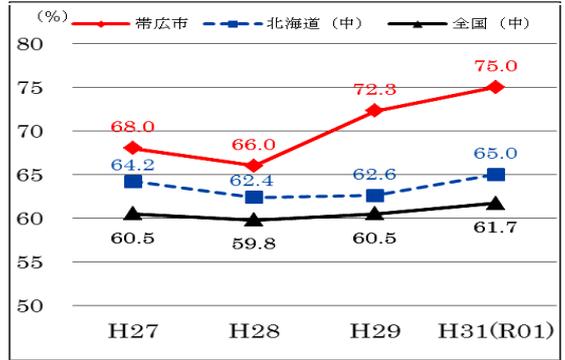
4 児童生徒の学習状況の概観について

① 国語の勉強が好きな児童生徒の割合

【小学校】

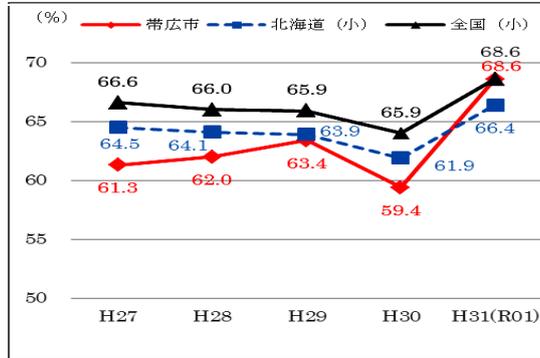


【中学校】

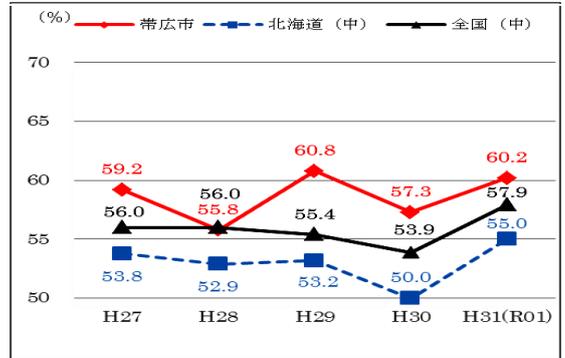


② 算数・数学の勉強が好きな児童生徒の割合

【小学校】

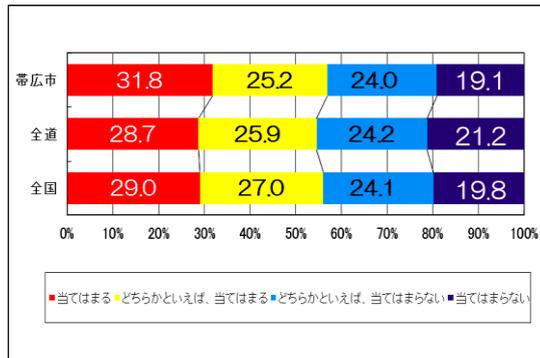


【中学校】



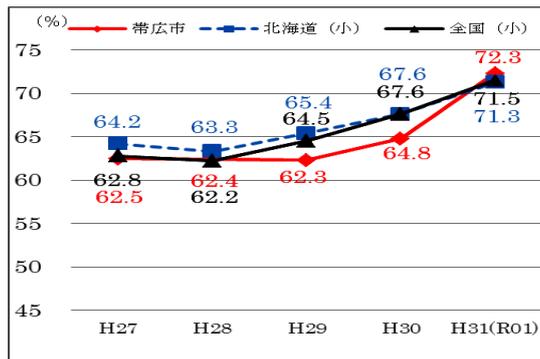
③ 英語の勉強が好きな生徒の割合

【中学校】

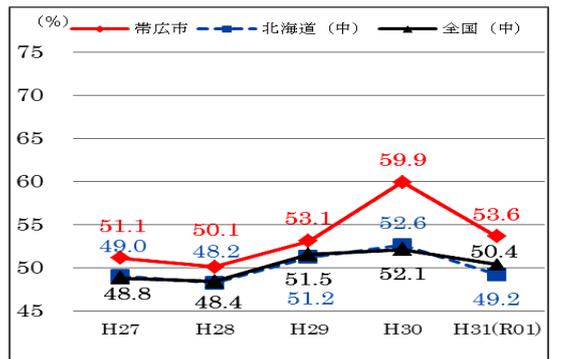


④ 家で、自分で計画を立てて勉強をしている児童生徒の割合

【小学校】

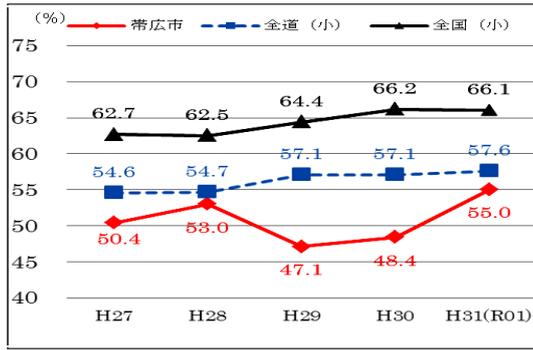


【中学校】

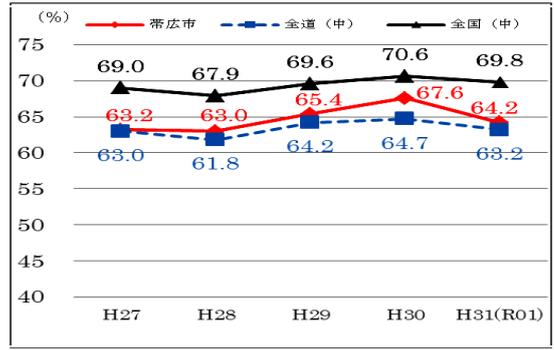


⑤ 普段（月～金）、1日当たり1時間以上勉強する児童生徒の割合

【小学校】

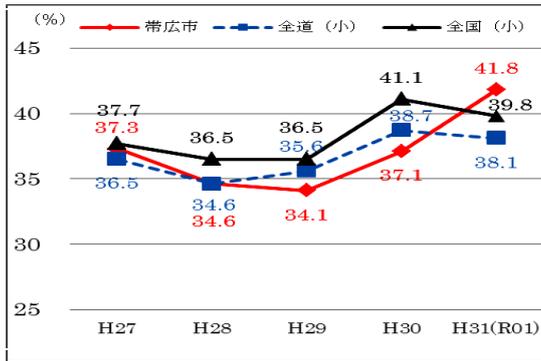


【中学校】

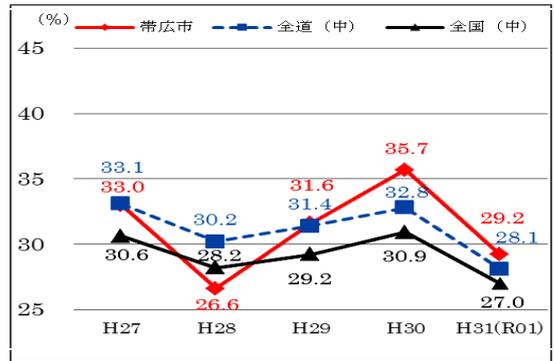


⑥ 普段（月～金）、1日当たり1時間以上読書する児童生徒の割合

【小学校】

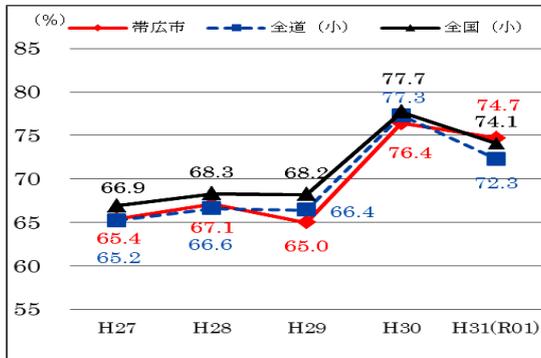


【中学校】

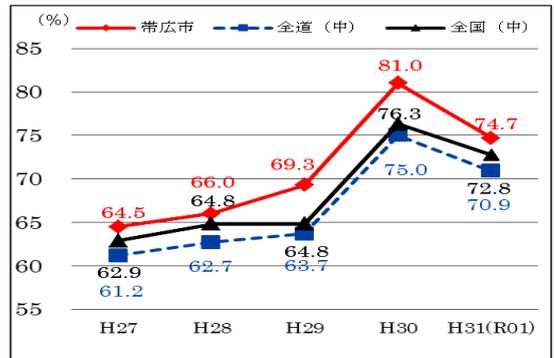


⑦ 学級の友達と(生徒)の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりできていると思っている児童生徒の割合

【小学校】

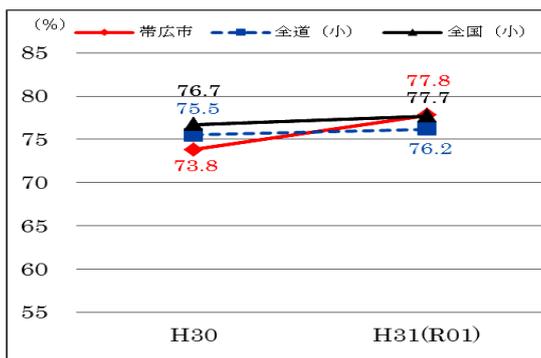


【中学校】

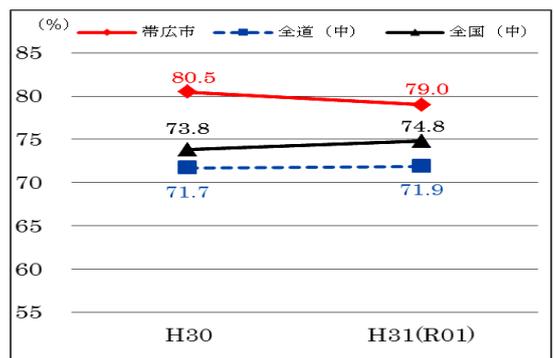


⑧ これまでに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思う児童生徒の割合

【小学校】



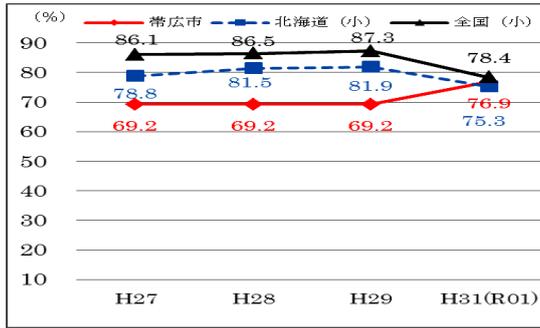
【中学校】



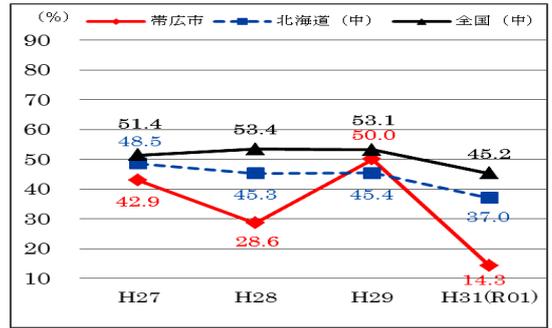
5 学校の学力向上の取組状況の概観について

① 国語の指導として、家庭学習の課題（宿題）を「よく行った」学校の割合

【小学校】

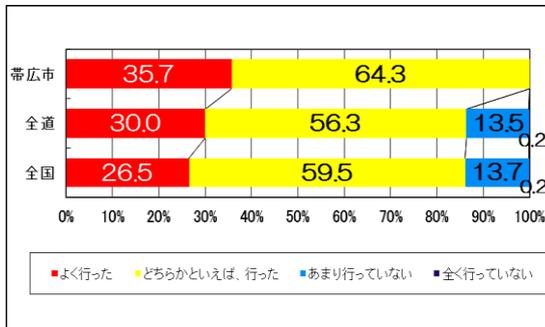


【中学校】



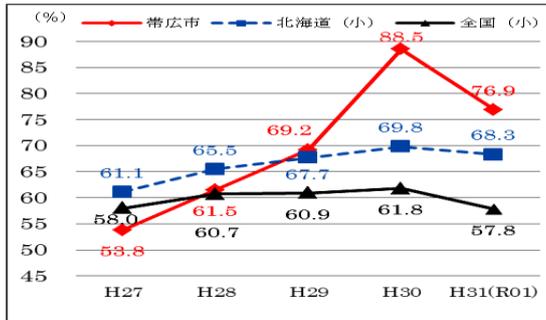
② 英語の授業において、生徒が英語に接する機会を増やし、教室を実際のコミュニケーションの場とする観点から、授業を英語で行った学校の割合

【中学校】

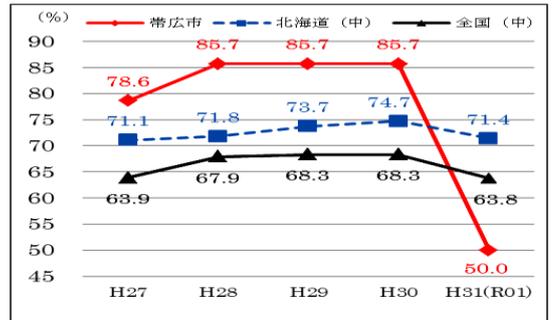


③ 学習規律（私語をしない、話をしている人の方を向いて聞く、聞き手に向かって話をする、授業開始のチャイムを守るなど）の維持の徹底を「よく行った」学校の割合

【小学校】

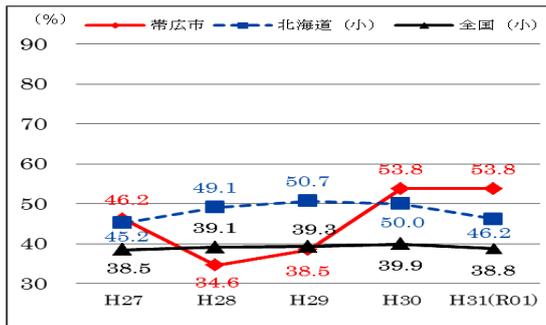


【中学校】

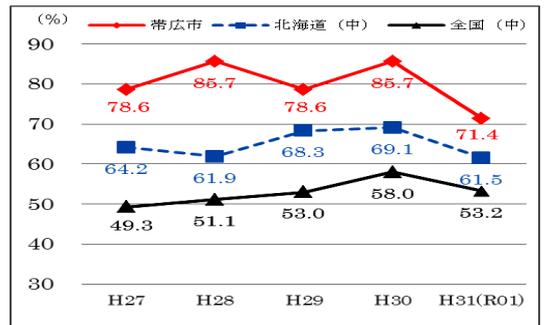


④ 授業中の私語が少なく、落ち着いていると「そう思う」学校の割合

【小学校】



【中学校】



6 考察

(1) 児童生徒の学力の状況について

小学校では、国語、算数ともに全国の平均正答率を下回ったが、昨年度と比較すると、全国の平均正答率との差は縮まり、改善の傾向が見られた。

中学校では、国語で全国の平均正答率を上回った。数学については、全国の平均正答率を下回ったものの、昨年度と比較すると、全国の平均正答率との差は、ほぼ同等であった。また、今年度新たに実施した英語「聞くこと、読むこと、書くこと」については、全国の平均正答率を下回り、課題が見られた。英語「話すこと」については、参考値ではあるが、全国（国公私立）の平均正答率を上回る結果となった。

国語、算数・数学については、各学校において、これまで学校改善プランに基づいた学力向上に係る取組を継続して進めてきた成果が表れたものとする。

なお、英語については、本調査の詳細な分析を進め、授業改善に向けた取組を進める必要があると考える。

(2) 児童生徒質問紙から

「国語や算数・数学、英語の勉強は好きですか」の質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、いずれも全国平均と同等、または全国平均を上回った。国語や算数・数学、英語の勉強に対する児童生徒の興味・関心の高さがうかがえる。

また、「家で、自分で計画を立てて勉強をしている」の質問に対して、「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、小・中学校ともに全国平均を上回ったものの、中学校では、昨年度と比較して減少した。

「普段（月～金）、1日当たり1時間以上勉強する」と回答した児童生徒の割合は、いずれも全国平均を下回ったものの、小学校においては改善傾向が見られた。

「普段（月～金）、1日当たり1時間以上読書する」と回答した児童生徒の割合は、昨年度と比較すると、中学校で減少したものの、いずれも全国平均を上回っており、日常的に本に親しむ習慣が身に付いているものとする。

「学級の友達と（生徒）の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」「これまでに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか」の質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、いずれも全国平均を上回り、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善が進んでいるものとする。

(3) 学校質問紙から

「国語の指導として、前年度までに、家庭学習の課題（宿題）を与えましたか」の質問に対して、「よく行った」と回答した学校の割合は、小・中学校ともに全国平均を下回ったものの、小学校においては改善傾向が見られた。しかし、中学校においては、全国平均を下回る結果であった。

「英語の授業において、生徒が英語に接する機会を増やし、教室を実際のコミュニケーションの場とする観点から、どの程度、授業を英語で行いましたか」の質問に対して、「よく行った」「どちらかといえば、行った」と回答した学校の割合は、全国平均を上回った。

「学習規律（私語をしない、話をしている人の方を向いて聞く、聞き手に向かって話をする、授業開始のチャイムを守るなど）の維持を徹底しましたか」の質問に対して、「よく行った」と回答した学校の割合は、小学校において全国平均を上回ったものの、これまで全国平均を上回っていた中学校においては、全国平均を下回る結果となった。また、「授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか」の質問に対して、「そう思う」と回答した学校の割合は、小・中学校ともに全国平均を上回ったものの、中学校では、昨年度と比較して減少した。児童生徒の規範意識については、今後も向上が図られるように努める必要があると考える。

7 改善の方策

学校においては、今年度から教科に関する調査問題が、知識と活用を一体的に問う問題に見直されたことや、新たに中学校に英語を加えて実施されたことを機会に、授業改善を一層進めることが大切である。また、全国学力・学習状況調査の結果等をより活用・分析することができる「学校／学級別解答状況整理表（S－P表）」を活用し、学校・学級の学習上の課題を明らかにするとともに、学校における指導の充実を図っていくことが大切である。

なお、日常の授業改善や指導の充実としては、以下の視点で取組を推進していくことが必要である。

- ① 授業時間の導入段階に目標（課題・めあて）を提示し、児童生徒に課題意識をもたせるとともに、授業時間の終末段階では今日学習したことを確認する（まとめ・振り返り）をする。
- ② 発問を精選する。
- ③ 学習量の確保や定着・まとめ・振り返りの時間をしっかりと確保する（タイムマネジメント）。
- ④ 主体的・対話的で深い学びとなる学習形態の工夫や単元全体を見通した計画を行う。
- ⑤ 学習規律を学校で統一し、各教室に掲示するなど学校組織として取組む。
- ⑥ 家庭学習の時間の確保と学習習慣の定着のため、より一層家庭と情報や実態を共有し連携を強化する。

教育委員会においては、学校教育指導訪問等を通して、日常の授業改善や指導の充実が図られるよう指導助言に努め、小・中学校の学力や学習状況の向上を目指すとともに、生きる力の基盤となる「確かな学力」の育成を図っていく。

取組に係る主な内容は、以下の通りである。

- ① わかる・できる授業づくりに向けた取組
 - ・校内研修の充実
 - ・OJTの推進
 - ・学力向上推進プロジェクトチームによる研修等の実施 等
- ② 家庭・地域社会及び関係機関との連携・協力
 - ・学校支援ボランティア等を活用した教育活動の推進
 - ・家庭学習や学習規律、生活習慣に係る啓発リーフレットの配布 等
- ③ 中学校区（エリア・ファミリー）を基盤とした取組
 - ・各エリアにおける学力に関する実態把握と分析、検証
 - ・小中一貫した連続性のある教育の推進 等

8 おわりに

学力や学習状況については、まだまだ改善が必要であり、取組の「徹底」と「継続」をしていくことが、学力や学習状況を向上させる一番の近道であると考えている。

学校や教育委員会は、各年度の結果を受けて改善方策を再構築できるものの、個々の児童生徒にとっては、一年一年がかけがえのない時間であることを念頭に置き、今後も学力や学習状況を向上させる具体的な取組を進めていきたい。

また、これらの情報は、帯広市のホームページ（教育行政“学力向上の取組”）において、適宜、公表・発信していく予定である。

令和元年10月 帯広市教育委員会